2024 年 3 月ボルネオスタディツアー感想文

教育の本質を追い求めて～ボルネオ島で見た無国籍の子どもたちの現実と未来への挑戦～

中村紡希　社会科学部二年

私は大学 2 年間の中で、東南アジアの教育格差問題について興味をもって意欲的に勉強していた。しかしながら、実際に現地の状況を自分の目で見ることもなく、ただ机上で勉強することが本当に価値あることなのか疑問に思っていた。そんな中、実際に現地に渡航して学校に行けない無国籍の子どもたちに教育支援を行う WAVOC 主催のボルネオスタディツアーの募集を見つけ、自分の学びをより深めたいと思い、参加することを決めた。

参加する前は、無国籍の人々がとても貧しい暮らしをしており、いちはやく助けなければならない危機的状況の中で日々怯えながら暮らしているのだと考えていた。何の罪のない子どもたちが正当な理由なく勉強の機会を奪われ、勉強をしたくてもすることができないことで、将来進む道の選択肢を狭められているという事実に悲しみや憤りすら感じていた。

しかし、実際に渡航して無国籍の人々が住む村を訪れ、自分の目でその現実を見て、自分の手で子どもたちに触れて、その考え方が大きく変化した。

無国籍の人々の暮らしは、私たちの目から見ると確かに衛生的ではなく、危険と隣合わせの日々かもしれないが、そこに暮らす人々はとても生き生きとした、明るい

笑顔に満ち溢れていた。子どもたちの無邪気に遊ぶ姿は日本にいる子どもたちと何も変わらなかった。

それと同時に、村にいた多くの子どもたちがスマートフォンを持ち、Instagram や YouTube 等の SNS やネットゲームを使いこなしていた。私はこのことに大きな衝撃を受けた。無国籍の人々だからといって、本当に危機的に貧しい状況にある人々はひと握りで、多くの家庭では子どもにスマートフォン等の娯楽を与える金銭的余裕があるのである。

今の時代、どこにいても、オンラインサービスを利用すれば自分の学びたい教育に関して容易にアプローチすることができる。村に学校がなければ、そして、村にある学校での教育よりももっと高度で専門的な勉強がしたいのならば、インターネットを介してオンラインで勉強すれば良いのである。

しかし、そんなことをしている子どもを私は誰ひとり見つけられなかった。基本的にはゲームをしたり YouTube を見るなど、娯楽の範囲内でしかスマートフォンを使っていなかった。

そもそも一定の年齢になったら働きに出るか、婚約するかの人々に勉強するモチベーションなど、ほとんどないに等しいのである。

そこから、私は今後の課題として、子どもたちが主体的に学びにアプローチしたいと思える環境づくりが必要不可欠であると感じた。学ぶことで得られる楽しさを子どもたちに伝えていきたい。

しあわせの在り方、知りたくないですか？

松浦静香　社会科学部二年

私は当初「幸せ」について考えることを目的の一つとしていた。私自身、ここ 1 年で様々な問題や苦悩に直面し、漠然とした希死念慮とともに自身は不運で不幸であると思い

込んでしまうときが多々あったからである。31 期の理念と渡航目標は「出会ったすべての子どもたちとしあわせを育む」となっているが、「しあわせ」とは一体何であろうか。大変抽象的かつ主観的なものであるため、この目標は果たして達成できているのか判断するのは困難であると感じる。しあわせの形は人それぞれではあるが、私は無国籍問題や移民問題、貧困といった過酷な状況の中にいながらも、その中から育まれる笑顔の根源を探しに行きたいと思った。現地に赴くまでは、子どもたちの笑顔はカメラを撮る際のみに振り撒かれ、現状はかなり残酷で辛い思いをしている子が多いのではないかと考えていた。しかし、実際に歌を歌ったり手紙を作ったり実験をしたりと、子どもたちと直接触れ合うことで、自然な笑顔や心からアクティビティを楽しんでいる様子も見ることができ、私たちにとってはなんでもないようなことでもそれが大きな喜びや幸せにつながるのだと実感した。

さて、では他方で、生活水準が上がれば、それは果たして彼らのしあわせに直結するのであろうか。私はある日の振り返りで、ゴミを当たり前のように近くの地面に捨てる子どもを見て、彼らはゴミで溢れている生活に慣れているが、その生活を当たり前と感じるのは本当に彼らにとって満足のいくことなのかと疑問を投げかけたことがある。慣れは痛みを軽減させるが、それは軽減というよりも「麻痺」につながっている可能性もあるのではないかと。その際に、他のメンバーから「その問いは自身の日常生活や常識に囚われており、野暮だ」といった意見も得た。確かに、側から見ると「気の毒なことだ」「おかしい」と考えられることでも、当の本人は特に何も感じていない場合も多いかもしれない。

今回のツアーでは、学校に来ている子たちは中学生以下が大半で、それ以上の年齢の子どもたちは仕事などをしているため、子供たちといっても比較的低年齢の子としか関わることができなかった。自我が確立しかけているであろう中高生が少なかったため、複雑な時期にいる子どもたちのリアルな反応を知られなかったのが少し心残りであった。こういった年齢にいる子たちは、自身より豊かな国から来た人たちを少し疎ましく思うかもしれない。

思春期にいる子供たちのしあわせについても今後探っていきたい。今回の渡航は 9 日間で準備期間も少し短かったが、これらの活動を未来に繋げるためにも、私たちがこれから何を考えてすべきであるかを定めていくことが重要となってくる。自分たちの限界や可能性に果敢に挑戦していこうと思う。

遠くの国で、お金もない大学生に出来ることって？

前田美頼　文学部二年

学生が海外でボランティアをして、出来ることは何だろうか。「善意の井戸[1]」がヒ素中毒を招いたり、ボランティアが現地の人びとの収入源だったりする事実を知り開発支援の在り方について葛藤していた。その答えを模索するためボルネオプロジェクトに参加を決めた。CP（マレーシア大学生）と協力して行うことと、教育に魅力を感じたからである。一方的でなく持続可能な支援だと考えた。

国籍については無力さを痛感した。渡航前は、教育を受けるため、国籍を持つことが重要だと思っていた。しかし、村の人々は国籍取得について、困難過ぎてあまり考えないようにしているように感じた。そこで、彼らの生活の中で最大限の幸福を育むことが重要だと考えるようになった。そして、国籍がなくても教育が受けられなければならないと気付いた。新たな葛藤も生まれた。子どもたちは、将来の夢は、警察官や先生になることだと目をキラキラさせて話してくれた。眩しさと同時に切ない。私はその夢を実現することがどれほど困難か知っているから。彼らに勉強を教え、勉強すれば人生がより豊かになると知らせること

[1] クローズアップ現代:善意の井戸で悲劇が起きた.NHK,2008/10/28 放送.(テレビ番組).

は本当に彼らの幸せか？豊かな選択肢がある世界を知ってしまったうえで、自分には選択肢が与えられていないと自覚することは酷ではないか。また、教育支援について、学びの種を撒けばだんだんと芽吹き、花が咲き得るのではないかと思っていた。しかし、土壌がないところに種を撒いても芽吹くのは難しい。そもそも村には「学びが重要だ」「子どもは学校に行く」といった社会規範がほとんどないのではないか。学ぶ意味やその楽しさを伝えるなどして、まずは土壌を耕す必要があるのかもしれない。

コタキナバルでの最終日、達郎さんがおっしゃった「子どもたちに純粋に愛を注げるのは BP だけ」という言葉が心に残っている。ボルネオプロジェクトは布教や開発支援による利益を目的とはしていない。これこそが、学生の私に出来ることだと思った。子どもたちの頭の片隅に BP との思い出が残っていて、自己肯定感の一助になれていたら嬉しい。改めてボルネオプロジェクトの理念「出会ったすべての子どもたちと幸せを育む」を思い出す。子どもたち「の」ではなく「と」である。一緒に歌った時や無邪気に話しかけてくれた時、健やかな未来を願わずにはいられなかった。子どもたちと一緒に幸せ生み出す活動がしたいという思いが、今回の渡航を通してより強くなった。

最後に、このような機会を設けてくださった雪乃先生、達郎さん。様々な情報を教えてくださった BP の先輩方、KK の大切な仲間である CP、そして一緒に笑い、悩み支え合った BP31 期のみんなに感謝申し上げます。夏の渡航を更に良いものとするためこれからも努力を続けていきます。

教育支援ボランティアとしての介入とごみがあふれる村

水野 蘭　国際教養学部一年

村に一歩足を踏み入れると、人一人がやっと通れるほどの幅で造られた橋が家々の合間を縫って奥へと続き、その下にあったのは、おびただしい数のごみだった。ペットボトルや、ビニール袋、お菓子の包装などがマングローブ林の湿地を埋め尽くしている光景は想像を絶するものであった。渡航前は気にもかけていなかった廃棄物の存在。ごみを分別し、捨てるということは当たり前だと思っていたが、考えてみれば村の人々にとっては難しい

ことである。この感想文では、村を訪れて気付いた「ごみ」に対する認識の違い、そしてそれに対する見解を述べていこうと思う。

ごみを捨てるということにどのようなメリットがあるのか。きれいな環境は衛生的にも精神的にも安心できる効果を与える。ごみの放置は悪臭と菌の増加を促し、環境の乱れとメンタルヘルスの相互関係は心理学的に理解されている。

それでは、なぜ村でごみが放置されるのか。まず、ごみを出すという行為は時間と手間がかかるうえにリスクが大きい。例えば日本では、指定された袋に入れ、指定された場所に指定された時間に出す必要がある。マレーシアの廃棄物処理のシステムは不明だが、このようにルールに則って出す必要があることは間違いないと思う。さらに、廃棄場所が住居から遠ければそれだけ時間がかかり人目に触れることも多い。隠れて暮らす村の人々にとって、ごみ捨てを手間、時間、そしてリスクまでも考慮してまでやるのは足が重いであろう。また、ごみ捨てが何の利益も生み出さないのが、難点であると思う。ごみを捨てるよりは働いて給料をもらうほうがましだと考えても無理はない。そしてなにより、村の生活にはごみを捨てる習慣がないということが一番の要因だと考えられる。ごみは決められたところに捨てるという感覚は習慣によるものである。人々にとって当たり前ではないならば、それはやるべきことでもなくなる。実際、村の人々はごみを放置していることに罪悪感や居心地の悪さは感じていなさそうだった。

これらの障壁を考えると、ごみを処理する行為は、村の人々にとってあまり魅力的なことではないかもしれない。しかし、それを乗り越えたあとは快適な環境が待っている。さ

らにごみがあふれかえることを心配する必要のない持続的な村づくりにつながる。

我々が、学生団体、そして教育支援ボランティアとして村のためにできることは限られている。また村にどこまで介入するべきかという線引きも難しいところであり、村の生活に変化をもたらすことが必ずしもよい結果とは限らないことはわかっている。しかし、それを仲間とともに話し合い、見極めながら、ボルネオプロジェクトの可能性に賭けたいと思う。

学生ボランティアとして感じた限界、そこから見出した可能性

赤嶺友香　文学部一年

「大学生によるボランティア活動の限界と可能性に挑戦する」ボルネオプロジェクトの募集要項に書かれていたこの文章は最初あまりピンと来なかった。そんなことよりボランティアをする、それ自体に漠然と憧れを抱いていた当時の私は「限界」というマイナスな言葉を気にも留めなかった。そんな当時の私にいいたいのは、最初はこの気にも留めなかったこの文言こそが 2024 年春渡航を通して感じたことを端的に表している、ということだ。これから、どういったところで学生ボランティアの限界を感じ、そこから絶望し、それでも自分の中で納得できる解決策を考え、希望や可能性を見出したかについて述べる。

渡航 2 日目に、実際に無国籍の人たちが住む村に行き、子どもたちに「将来は何になりたいか」というインタビューを行った。彼らは「医者になりたい」「教師になりたい」とキラキラした目で答えた。そのとき私は、このような将来に希望を抱いている彼らのためならどんなことでもしてあげたいと強く感じた。私は国籍を彼らに取らせて、夢を叶えてあげたいと思うようになった。しかし、国籍は取るのが複雑で困難だということや、そもそも国籍をとりたいと思っている人が少ないという現実を、その後、先輩から教えてもらって知った。

限界を感じたのは、まず一つ目に、こちら側が良かれと思って国籍取得に奮闘したとし

ても、それは現地の人にとっては望ましくない場合もあるという点だ。二つ目に、仮にもし取りたい人がいて、国籍を取らせてあげようとなっても、学生の短期のボランティアではできない、ということで限界を感じた。

そこから、国籍を取得しないという選択を大半の人はするため、医者になりたいと言っていた子どもたちの夢は叶えてあげられず、将来は工事現場で働く運命にあると知った。それでは将来の可能性を広げるための勉強を教える私たちの存在意義はないのではないか、と絶望した。勉強は将来の可能性を広げるために有効な手段だと思っていた私は、将来、工事現場で働くことが決まっている彼らに勉強を教えても無駄ではないかと悲観的になった。

しかし、勉強をする、学ぶ、という行為は将来の可能性を広げるためだけのものではなのだと凝り固まった考えを柔らかくし、思い直した。勉強することで、それ自体の楽しさを感じたり、達成感を得られたりする。また目標を立て、その目標を達成するためには何をすべきか逆算し把握する計画力や、目標に向かってコツコツと学ぶことで継続力が身に付く。さらに思考力も得られる。勉強することでこれらのメリットを得られることを子どもたちに伝えていきたいと思うようになり、私たちが彼らにできることの可能性を見出すことができた。

これらの経験を踏まえ、次回の渡航では子どもたちに勉強することでたくさんのメリットがあるということが伝わるような授業を展開したい。

渡航期間中の考えの変化

渡辺昂生　政治経済学部一年

私は渡航期間中繰り返し、ボルネオプロジェクトがどのようにあるべきなのかについて考えた。帰国してしばらく時間がたち、私たちのあるべき姿について、渡航前後で考えがすこし変わった部分があることに気が付いた（まだ断定はできないが、、、）。

私がこのプロジェクトに参加した際に立てた目標は、マレーシアの無国籍問題を解決したい、というものではなく、ただ純粋に「無国籍の子どもの笑顔が見たい、彼らの人生においてかけがえのない経験を与えたい」というものであった。　初めに無国籍の子どもがたくさんいる村に行き、CP メンバーのうちの何人かが子供たちにお菓子をあげている場面を目にした際、お宅訪問に行き、その家のお母さんの、遠回しに寄付を期待していたという旨の話を聞いた際、この目標を達成するための一番の近道は、実は寄付なのではないか、という考えがよぎった。

渡航前、与えるだけのボランティア活動、つまり「寄付」について悲観的であった理由は、無国籍の方々が現状に満足してしまうきっかけを作ってしまいかねないから、また、寄付をしている側がその手を止めてしまったときに、彼らが生活していくことが困難になってしまうから、というものだった。しかし、渡航中の BP メンバーとの話し合いや、村での授業を通して、たとえ社会問題の根本的な解決を目標としていない団体の活動であっても寄付をするべきではない、と新たな理由をもって、考えるようになった。

1 度目の渡航を終えた今、ボルネオプロジェクトの理念、そして今回の私の渡航目標を実現させるために 1 番大切なことは、マレーシアの無国籍の子どもたちが何を求めているのかを理解する、ということだと考える。渡航期間中、最も子どもたちの笑顔で喜んでいる姿を見ることができたのは、先ほど記した CP メンバーの一部がお菓子を配っている場面ではなく、私たちが企画した歌や手紙の授業中、シールやペンを配って渡した時、であった。それに対して難しい実験の授業をした際には、それほど笑顔を見ることができなかった。（こう言う真面目な授業も必要だとは思ってい

るが、理念や目標を実現させるために必要かどうかを問われると、、、）この笑顔を自分の目で確認した際に、これが私たちの活動において、寄付を絶対にしてはいけない理由なのかなと思った。文化の違う国の子どもたちが何を求めているのか、どうしたら笑顔を引き出すことができるのか、次回の渡航に向けて企画を考える際、その点について他のメンバーと熟考したいと思う。

葛藤と答えのない問いに向き合う

星若奈　国際教養学部一年

『世の中には勉強をしたくてもできない子どもたち、学校に行きたくても行けない子どもたちがたくさんいる。その子達に教育を届けられるような、夢をもつ機会を与えられるような大人になりたい』と、私はずっと思っていた。今回の Borneo Project に参加したきっかけも、自分の理想の将来像に少しでも近づくために、そして実際の様子を自分の目で見て遠く離れた世界で起こっていることを自分ごととして捉えられるようになるためだった。

実際に移民村に訪れて教育企画を実施してみて、渡航前のイメージと現実との間に大きなギャップがあることが分かった。渡航前は『勉強をしたいのにできない子どもたち』というイメージを持っていたが、移民村の子どもたちにとって一番の課題となっているのは、勉強を受ける環境が無いということよりも勉強へのモチベーションがない、勉強の意味を見出せていない、ということであるのだと渡航を経て感じた。村の子どもたちは日本で勉強のやる気を失っている子どもたちと同じように、スマホでゲームや SNS をすることに多くの時間を費やし、自ら勉学に励むような姿は見られなかった。スマホがあれば、外の世界を知ることができるし、勉強だってできると渡航前は考えていたのに、実際は子どもたちがスマホを娯楽にしか使っていないという状況に衝撃を受けた。しかし子どもたちの視点から考えてみると、スマホを持っているならそれを勉強に使えばいいという渡航前の私の考えは、とても一方的で自分勝手な考えに過ぎないのだということが分かった。

無国籍の子どもたちは、そもそも夢を持つ自由すらなく、彼らの将来の選択肢はすでにとても限られている。どんなに勉強をしてもなりたい夢の自分に近づくことができないとしたら、一体彼らは何のために勉強をすればいいのだろう。そう考えたら私は、彼らに教

育を届けることが本当に彼らのためになっているのか、分からなくなってしまっていた。

そうしてこの活動に対して思い悩んでいた頃、追い打ちをかけるようにある悲しいニュースが届いた。春渡航で訪問をし教育企画を行った村、KPD village が政府の摘発を受け破壊されたということ。GW 渡航としてちょうどコタキナバルに飛び立つ 1 週間前にこのニュースを耳にした私は、ますます自分たちのできることの小ささ、そして子どもたちにとって本当に必要なのは何なのかと思い悩むこととなった。GW 渡航であと 1 週間後には会えると思っていた子どもたちと会えなくなってしまったこと、子どもたちと楽しい思い出を作ったあの場所がもう跡形もなくなってしまったということ、そして素敵な笑顔を見せてくれたあの子たちが、今怖くて悲しい思いをしているかもしれないと考えたら、とても不甲斐ない気持ちで悔しかった。

GW 渡航を目前に控えた今の私は、まだ自分の中で私たちが子どもたちにできることは何なのか、彼らが本当に必要としていることは何なのかが分からずにいる。正解を見つけなくてはと焦ることもあったが、正解が分からなくても自分の中でたくさん考えてたくさん悩んでいいのだと、今は思えている。8 月から留学を控えている私は今回の GW 渡航で BP としての活動が最後になってしまうが、私は BP を卒業してもコタキナバルで出会った子どもたちの未来が少しでも明るくなるように、彼らが希望を持てるような世の中を作っていくためにこれから多くのことを学び、いつかまた成長した姿で、もう少し頼もしい姿で彼らに会いに行こうと心に決めた。

ボランティアのあるべき姿

中村慎吾　国際教養学部一年

今回のスタディツアーを通して生まれた、理想とのギャップに関する二つの疑問について考える。今回の渡航の志望動機の一つに、世界規模で存在する構造的暴力の解決に少しでも貢献できることはないか考えたいという思いがあった。ここで言う構造的暴力とは、途上国で貧困に苦しむ人々はどう頑張ってもその状況を改善することはできず、彼らの生活を変えうる力を持っているのは豊かな人々しかいないが、そのほとんどが貧しい人のことなど眼中に入れないという構造のことだ。自分もこの構造上の不作為の加害者の一人に当たるのではないかと思い、少しでも自分にできることはないか考えてみたかった。これ

が当初の考えであり、自分の理想である。

一つ目の疑問は、現状を苦痛に感じてそこから脱却したいという強い意志が彼らにはないのではないかということだ。村の人へのインタビュー結果を見ると、そう思われるような回答もあった。しかし、彼らが周りのマレーシア国民と比べて、ましてや日本国民と比べて貧しく不平等な状況で生きているのは事実である。ただ、慣れ親しんだ土地や仲間と分かれてフィリピンに戻って国籍を取得するくらいなら現状維持を望むというだけであって、もし他は一切変わらないまま、収入が増え、綺麗なトイレを使えて、大学にも行けるようになるならその方がいいに決まっている。限りなく低い可能性に縋るくらいなら現状を受け入れたほうがマシだということなのだろう。

では、もし彼らが現状を受け入れ、中には満足している人もいたとした時、それでもより恵まれた生活を送ることができる可能性を提示することは、価値観の押し付けとして避けるべき行動なのだろうか？これに関しては、一度メンバーと話した時、メンバーは、「ただ勉強の楽しさを教えてあげれば良いのでは」という意見に落ち着いた。しかし、勉強の楽しさを教える目的とはなんだろうか。単に「何かをして楽しい」という感覚を味わって欲しいだけなら他にもっと楽しいことはいくらでもある。勉強の楽しさを知ってもらうことには今後の彼らの自発的な学習を促すという目的があり、それは無国籍であるがために公教育を受けられないという不平等を是正するためだ。そもそも公教育の目的とは、市民として社会で充実した生活を送るための教養を身につけ、また将来の選択肢を豊かにするためのものである。つまり何が言いたいかというと、このボランティアの最終的な目的は、彼らの将来の選択肢の拡充に置くべきであり、ただ過去の代を参考にして似たような教育企画を行うだけでなく、教育企画をベースにしながらも、常に何か新しい道を模索し続けるべきではないかということだ。

教育支援ボランティアという形を否定するわけではないが、教育支援はあくまで彼らの生活を改善するための手段の一つであるべきだ。もし他にもっとできることがあるにも関わらず教育に固執するのであればそれは自己満足のための押し付け的なボランティア活動になってしまう。本当に望むべきは彼らの更なる将来的な幸せか、それとも勉強の楽しさを教えられたという自己満足か、よく考える必要がある。仮に他の道の模索が困難なものだとしても、彼らとは違って、我々にはそれを考え、挑戦する余裕があるのだから。